

## 平成 20 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

急性期脳外傷者の注意機能と記憶力における包括的評価要因の検討

学位の種類： 修士（作業療法学）

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学 系  
学修番号 07896602

氏名： 小貫 貢

（指導教員名： 大嶋 伸雄）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A 4 版）に収めること

脳外傷者の主要な障害として注意や記憶の問題が知られている。注意障害が記憶障害に先行して出現することや、標準化された注意検査法（標準注意検査法）において聴覚性・視覚性の記憶力検査が始めに示されていることなどから、注意と記憶の能力が密接な関係を有していると分かる。御領によれば、人間の認知概念において聴覚、視覚情報処理は初期過程に行われるとされ、三井によれば、急性期評価は観察評価に留めるか、数唱や Tapping Span が適しているとされる。これらの人間の認知概念や患者負担軽量化の観点からも、先に示された聴覚性・視覚性の記憶力検査が急性期の評価として望ましいことが分かる。

今回我々の研究目的は、急性期脳外傷者における評価の中で日常生活能力と関連の深い評価項目を検討しその有効な病期別相関順序を示すことである。これは生活能力に焦点を当てたアプローチを行う急性期作業療法の実施において有効な要因とその時期を検討することにつながる。

対象は平成 19 年 11 月から平成 20 年 10 月まで急性期病院に入院し意識状態が改善した 20 名を対象とし、受傷後 2 週、4 週、6 週の計 3 回、Ponsford らによる観察による注意評価スケール（以下 ARS）、数の逆唱（以下 DSb）、Tapping Span の逆反応（以下 TSb）、Functional Independence Measure（以下 FIM）を実施した。統計処理はパス解析を用いた。

以下に結果を示す。平均 45.6 歳（±22.7）、性別は男性 19 名、女性 1 名。病態は、脳挫傷 9 名、急性硬膜下血腫 7 名、急性硬膜外血腫 3 名、外傷性くも膜下血腫 1 名であった。パス解析からは 2～6 週において ARS から FIM への係数が -0.589、-0.371、-1.226 となり、TSb から FIM への係数が 0.405、0.450、1.937 であることから、FIM に対して ARS が逆相関の影響を与え、TSb が正相関を与えていることが分かった。6 週になると DSb でも FIM への係数が -1.148 として示され、逆相関の影響を与えることが分かった。意識状態について、2 週では ARS への係数が -0.720、4 週では FIM への係数が 0.449 であり、2 週では間接的に FIM への影響を与え 4 週では直接的に正相関の影響を示した。尚、6 週では直接にも間接的にも FIM への影響は示されなかった。

ADL に受傷 2 週で影響を与えるのは、観察上の注意力評価や視覚性記憶力評価であり、これらの評価は 2 週から 6 週まで継続して ADL と関係の深い評価であった。聴覚性記憶力評価は、少なくとも受傷 6 週までの評価には適さない可能性を示した。最後に、急性期作業療法においては、受傷 2 週と 6 週では観察上の注意力の改善を視野に入れたアプローチや、視覚的な課題によるアプローチを行うことが有効であることが分かった。また受傷 4 週では意識状態改善を考慮に入れる事が有効であった。